# 教育長室だより

第 39 号
2023.6.26

梅雨といえばしとしとと長雨が続くイメージですが近年の梅雨は少し印象が違ってきています。梅雨の割に晴れ間も多いですが、代わりに毎年のように線状降水帯による集中豪雨に見舞われる地域があります。〇〇豪雨という言葉がニュースとして取り上げられています。気候変動の一つなのでしょう。

梅雨が明けると１学期も終盤です。どのような学期だったでしょうか。

前回、全国的に不登校が増えていることについて、コロナ禍との関連で思うところを述べました。

今回は“学校へ行く”ということについて考えてみたいと思います。

〇

不登校に関しては様々な言説がメディアで発信されています。

今の風潮を象徴する言葉の一つに「学校は命がけで行くところではない」という言葉があります。これはいじめなどで自殺する児童・生徒がいる例を捉えての言葉です。学校へ行くことが子どもの幸福な成長にとって絶対的に不可欠であるという観念に異議を唱える言葉です。そこまでして学校に行かなくても良いでしょうと言っています。

全くもってその通りで、命より大事なものがあろうはずがありません。

しかし、もう少し考えてみる必要がありそうです。

学校へ行かない、あるいは行けない状況をどう捉えるか…から始めないといけないように思います。

〇

「日本型学校教育」という言葉があります。これをふまえて、今、「令和の日本型学校教育」を探る、あるいは構築する動きが文科省等で議論されています。これはこれまで行われてきた“授業”像を、ICT等を活用して“対話的で主体的な深い学び”を目指す新しい授業像に変革しようという動きです。

〇

その前に「日本型学校教育」について簡単にまとめておきます。日本の学校では各教科の学習以外に、前号で述べた特別活動等を含む活動が教育課程に含まれる点が諸外国の学校教育ではあまり見られない内容です。これはいわゆる学力としての教科の学習以外に、人との望ましい関わり方を学ぶための内容で社会性や対人スキルを身につけることに寄与しています。学級会や全校行事、掃除や係活動などがこれに当たります。

○

日本の学校教育は単に教科の知識や思考力などの学力を身につけるだけでなく、全人格的な成長を目指すところに特長があると言えます。

しかし、このことから人的な関わりが深く求められることになり、それも一因となって今の学校の大きな問題であるいじめや不登校が発生しているという論調が最近しばしば見られるようになりました。また、教員の指導の困難の原因の一つになっているとも言われています。

○

これまでは、日本型学校教育は素晴らしく機能していたと言っていいのではないかと思います。中東などの外国で日本型学校教育のシステムを取り入れる動きが現れているなど、国際的にも評価されている日本の学校教育です。

“学校へ行く”意味はまさにここにあると考えられます。人類の文化の継承である教科教育に加えて社会性など、全人格的成長を目指すと言うことです。これは控えめに見ても十分機能し、成果を上げていた教育のシステムです。

○

ところが、初めに述べた不登校の急増やいじめの多発などの問題の原因を追及するなかで、学校教育の一つの特長である“画一的指導”がやり玉に挙げられるという見方が生まれてきたのです。

個性の尊重と社会性は両立すべきであり、可能でもあると思われてきましたが、時代の流れとともに、ことはそれほど簡単ではないと考えられるようになったのかもしれません。学校教育に関わる教員の熱意によって日本型学校教育の実践が続けられてきましたが、教員の負担の大きさが社会問題になるにつれて、黄色信号が点ってきたようです。

○

フリースクールの台頭がこの変化の象徴の一つだと考えられます。公教育だけがすべてではないという考え方です。冒頭で述べた「学校は命がけで行くところではない」という論調もこのあたりから出てきたものでしょう。

とはいえ、今も学校教育はすべての国民の教育を担う大切な機能を持つことに変わりはありません。長い学校教育の歴史の中で培われた子ども観や教育観は大切な文化であり、積み重ねてきた教育方法や学校のシステムにも重要な価値があります。

○

学校教育の側に何らかの変化が求められていることは確かな気はします。思えば教育改革という言葉は長年唱えられ続けられた言葉です。令和の日本型教育を模索する動きがあるとすれば皆で議論すべきかもしれません。